老學心苑

上下

ヤ 9
1075

羽佐間先生口訣

老婆心書

櫻寧軒藏板

91-1843

老婆心書序

小方脉難於大方脉矣寒熱痛癢不能自言其病狀寸口脉象不足決診其虛實三関詮法茫乎如追影捕風吾安適從語有之如

保赤子心誠求之雖不中
不遠矣兒醫善讀古今方
書誠心惻怛如己患之求
其疾之所在然後處其湯
藥則肯綮恰中而奏其効
焉其下爲者或癖于溫補
或泥于寒涼各主張其所
好而不能折其衷甲曰溫
補我祖傳也乙云寒涼我
家法也實熱與漫衍虛寒
投硝黃令兒斃于瞬息間
者不可舉數也可喟嘆哉

羽佐間宗玄著國字保赤
書名曰老婆心書讀者勿
輕其文之國字勿厭其言
之丁寧是宗玄一片婆心
而心誠求之也
文化十四年丁丑春三月

下澣
東都侍醫法眼杉本良撰

河三奕書

老婆心書序

語曰。善言古者。合之於今。能述遠者。考之於近。故說事者。上陳帝王之功。而思之於身。下列桀紂之敗。而戒之於己。則德可以配天地。行可以合神明也。夫醫之為術。遠矣大矣。豈易言乎。講古以合之於今。辨遠以考之於近。論人以驗之於己。察痼疾之所根。知神奸之所伏。處其法方。攻其邪毒。

萬不誤一也。雖然。膠柱者。不能以鼓瑟。拘法者。不能以通變。伯樂之子。固暗於相馬之妙術。馬服之子。不知用兵之活法。何則不知合之於今。考之於迹。驗之於己也。譬之於釋氏談禪也。隔山見煙。早知是火。隔牆見角。便知是牛。猶是第二三之見非耶。若夫至於截斷衆流。則東湧西沒。逆順縱橫。與奪自在。禪猶為然。況於吾醫乎。是以

上池水飲藥三十日。見垣一方人。則謂扁鵲真面目。不具之於古人。而具之於今人。豈不亦可乎。不獨是為然也。伯兄於病視神。未有形而除之。故名不出於家。仲兄治病。其在毫毛。故名不出於閭。季扁鵲之於醫也。名出聞於諸侯。亦是後天之術已。吾未能有行焉。乃所願則學伯兄氏也。且予早歲已来。日夜積學。殆忘寢食。探討經籍。

漁獵百家。芒乎昧乎。未得其端緒。一旦忽然。如夢之覺。如醒之解。豁然明了。恍然超悟。大覺從前之講學誑人自誑。投書而嘆曰。今而予逢真師矣。於是單刀直入。以其所心悟。施之於病者。活死回生。與奪縱横。變通自在。視神之手段。總在掌中。不二之妙道。立地圓成矣。一日二三子執書進曰。是先生所嘗口授之緒言。恐其終無傳。故

筆之於書。以示之於同志者。願先生撰之名。予乃命以老婆心書。異日二三子進請曰。先生既已撰名。願壽諸梓。以傳之不朽。予聞其言。愕然驚曰。噫。二三子過矣。是予一家之私言。豈足以行諸世乎。且恐其徒求諸書。而不知反求諸己。徒視之於空言。而不知措之於事業。則此書亦是三日後之祭肉。害人不少矣。若夫不求諸書。而反

求諸己。不視之空言。而措之於事業。能嘗味外之味。能聞響外之響。雖無此書。亦何不可之有。然後能免乎認賊為子。以指為月之患矣。然後能知予所口授之意。真實為己。則不立文字。一超直入。平等圓覺。不亦愉快乎。二三子固請曰。若夫上等之士。不教能入。中等之士。不教不入。下等之士。聞教笑之。不笑不足以為道矣。且夫毀謗非笑之來。雖聖賢所不免也。內省而不疚。則毀謗非笑。亦何傷哉。弟子輩。嘗以先生所口授之意。施之於病者。十必愈八九。未嘗有誤治者也。先生之言。所謂確乎不可拔者也。人之讀此書者。幸有得先生之微意。則豈不亦非常之功德哉。願先生許之。予曰。非予恐世人之誹笑而深藏之也。唯以國字易讀而忽畧之。終不及知其深意

之所存也。是以抑而不許矣。且夫治之難能。莫難於嬰兒。不心誠求之。則不能達其病源也。古人有言曰。醫者仁術也。仁者能愛物。醫而不仁。如治人何。嗚呼聖人之道。有胎教焉。良醫之治。有胎養焉。兒之在胎也。一失其教。則終身之禍梯也。一失其養。則終身之病根也。不反身而誠焉。則安能得其活術於未生以前哉。二三子止矣。無復言。二三子猶立侍不退。不得已而許之。因次其語。以冠編首云。

于時

文化十三年丙子春三月

東都羽佐間資承宗玄甫撰

凡例

一是書也論古今諸名流醫說之是非及刀圭
矛戈補瀉溫凉調理飲食好惡宜忌無所不
備焉其以國字者則為令衆人易見耳

一病有寒熱虛實人有老少強弱雖然貴補賤
瀉好溫惡凉天下亦々皆是夫可補之症而
不補可瀉之症而不瀉其為害也大矣先生
所嘗發明者多矣今擧其一二如解顱龜胸
等之症古人皆治以溫補然其不為癈人者
幾希先生治之以寒凉之劑而莫不効者矣
此乃補可補之症瀉可瀉之症蓋古人所未

発而以覺後覺者也

一 摯先師之證業不以説聽見又不敢衒名於世只欲使嬰兒躋于壽城也

一 従婦人姙娠小兒出生胞衣血脈乃至急驚慢驚痃癖解顱亀脊中風偏枯痿躄水腫脚気勞瘵痘瘡傷寒陰陽症無不盡論也次之以主方委之以画畢且附以醫按是書以治嬰兒嗚呼嬰兒之治盡于茲矣哉

文化十三丙子夏日

門人 會津 大友同一恵蔭誌

東都 芝瓢羽佐間先生口訣

門人

東都 森宗哲清之
會津 蓮沼榮碩敬信
唐津 田邉玄樹靜交
備中 松山 鈴木三悅重房 述

天地萬物を生育するに人ハ言ふ及ばず禽獸魚虫草木にいたるまで各子孫を殖し壽命を保ちて。この世のあらんかぎり。人ハ人のつきぬやうに。鳥ハ鳥のつきぬ格。獣も魚も草木も億萬歳も。天地のかぎりなん限り。尽ざる格ふ子孫を殘すの

皆〳〵國たり。一年限の草は。一年ゞ天然一生の壽命也。一年の内より花咲實てゝ子孫を殖して枯やゝて。又翌年はその實よりも生じて。おのゝ一生の壽命を經事。虫も魚も鳥も獣も人も草木も同ることなり。人の飼給て養ふの虫を見るもそよ木をそよぶの何ぞ〳〵。天然さぞんの。一生の壽命を殖してすちがゝ。絶命の千年万年のおもめ〳〵のものも。何を時に中〳〵長生のまの命を殖てすのなるざるすの眼前たり。況や人は物更なるの貴は飼るの〳〵。はなよ天然を殖ゞ〳〵。そ内大人〳〵なるべ。おの〳〵我をして任せて。歌舞極楽を思のまれる。戯場より湯治より船遊山より花見より。遊びゆゝ〳〵は

るの野山に遊ぶより幸〳〵。小児は人のこの言もこゝろ〳〵ずに口きゝてもたゝ〳〵ぶれで何るも治より知なり。殖ぐ体の内より痛みあるをたゝず。抱かゝふよりて痛〳〵唸てと。腹の痛とおもひ。蛔虫より茶よと家内中がよつてかつて押つけるどする也。打〳〵治ぐ蛔虫きらぬこと。艾を脇へ一て。ひよ。大傷のできを灸すて。おすり痛と指るすあるも。是天然みあ〳〵もと吹て疝を求るといふ人のすちう。蛔虫者もこぶ〳〵。出へ虫を拾育て。すぎ法曜かのゝちに。咲を捧こず。指を主也へ己ゞ体よて寐薄もこゝく。自性と力おすする人の骨のかこすりて力のつくと同ゝ

みて。歩行もまく。産の通り毛と吹ぬ虫へうゑくと求ぬぶ
ど〳〵。是天然そこなり。高位大禄。豪富の家に生れも
下にハ立ず。まら〳〵まへ〳〵。帝にも。それ業より然胆よ
と云て。毛を吹虫へ。産婦ども。色天然ハ物を人のとり扱ひ
来の虫へ。飼ると大切にする。桐の木実澤山の二重
箱。その中ハ梨子地の名に詩。宮殿ハ拵へ。錦より黍ごとりのど
と云。船。常るカナアリやのまと育るど〳〵。大なるのよりもたい
とゝれ。食物ハ清潔の物ごとり。魚も鯉鱒長いも干鱈
みてハ。祢の乳力ハ落きに去るなり。富貴なるもの乳人の食物も
小児と同〳〵。もいもめんひや〳〵虫へ。生る乳汁とよろ〳〵
みなの乳汁なれど。強き祢へよくき乳虫へ。自然と

小児の祢ヨカの附ハ。もうすく少の風へ。ゆ霜ゲ湯
虫へ風も引やすく。それ業より減よ人参より。ゆんゲ与て
舟と山へあげるといふ。産の拵ハ。中〳〵ふて天然ハ
経ゲきれてるなり。又山ゆんも母の胎内へ。ぐどるいふ
五月めより。腹帯にて。ちゆ付〳〵れ。ちるゝ十月を経て。
涙〳〵とけ世へ去ゆ。ちるゆ。梅湯をもて洗れ。
眼もうとき。ぐ〳〵ちる去波ゆ虫へ湯ゲ耳へ。やゝ鼻へ
入るをふちゝゲ。聘にちるのぐ。ふるんゲず。衣服も焼
てつゝみゝゲ。後より祢へ。ちるゝ。寒ゝて。蒲団を何
たゝめてくるみ。頭へハ絡ぎれを掛ぐれまうよ五香
湯よ。蒲団よ。又ハ胎毒ゲ多て。五日も七日と乳いつけ

ぬぐよきたりぐ〜そひ。勝の法ぶぐと命すで五十も百と
笑へとすくるぐよきるぐ〜。七世へあるより早く天然流い
ゆ〜もる。地獄の責のもの流と。解すと思ふ何るす
ぐや。弱ても此て。与勢ふと勝ふと船るき浮世乳
と。佛ものの不潤潤ちるき鬼まい度〜がくと思ふて。
人の生死ま拘るすちるもぐ又ても居がく。天然流と
ぐても利るやものあれど。ちるる移〜ぐうるの知て。
用めの部ゆ〜ゆ〜。世ふに不得幼にまと肩詩
あまとなるぱてらのてやとへい志ある〜は
假名書本と見て行ぐ。萬ま一二と天然の一生とたも
ち孫ちんすやと。孤ちる邪ちるとの孫とるて文句ま

章にも拘ぐず。山人の生ちるのるもるぐめ〜ハ
老婆必切の言もあるんと。達者にハ〜らせて。只く世る
のるると書ぐる。天然流て毛吹流。ぐ〜ぐふ〜又孫ぐ
年生の書まにと。不快のるのもの孫とまのけ
〜はハ。狂又用ふも立てのあるぐ。抑少人の丈夫不丈
夫ハ。母の胎内より書才一なれバ。腹の内より天性のま
に知なとのあり。夫婦人の初て孕者ハ。若と産る者
胎内に三百日あて。産るる所月より延て。十月めに
産るもの多〜。然るに胎めて或ハ八月九月ゆて産るハ
是皆何ゆ不ありてのるり。初の産ハ三百日ゆ満
ざれぐ。出生の山人と虚弱るり。産婦もあきあと

ての産なり。産後の肥立をあ〳〵かるべし。二度目の産ようしてハ胎内よ三百七十五日あるべしてハ。産るとの五十月目に産るなり。三百日あるてハ初の月の朔日にてもなり大の月だなりにて。十月めの晦日で三百日となれば大の月小の月の違もあり。又月初よりするとに月末にするとにて日数の十日も廿日も違ふなり。初産ハいづれ十一ヶ月めでなるべし。二度めハ十一ヶ月めよ産るものだ。三百日よ満ぬなり。それ也初産ハ多〳〵。こゝらのすも。何なにといふに仙術ぬなり。まや初産ハ流産ゆてと二度めハ。三百七十五日ゆて産るなり。京都よ加川子爵といふる婦人家の医あり。常府の玄悦なるよう八代もつゞあたり。この仁産術のすハ誠よ天然を悟えてその術

世の人をすくふの術にて。濟世館と山脇道作法眼の名付られ〳〵よ。所を京の地ハ三代目玄悦子の門人を始伝ふ。その流ずゆ第一に腹帯を用ず。懐妊の後帯を用ハ人ごとに。天地の日性のある者乃ざる者なり。猫も犬も出産腹帯をするとなり。然ず後帯をするとなるも大の忌語後帯の初ハ昔神功皇后三韓征伐の節。御懐妊にて渡せられ〳〵布を以て御後をまとひ弦ひ。軍務あり〳〵に帰ず御安産の由ゆる吉例として後帯を用始ゆ伝れぞ。是ゆて日本の書記ハ后西征〳〵時。御産月にて帰ず。御産延るゆたと。神を祈て用腰ハ石を立て挿弦ふとあり。御後帯を用弦〳〵るなり。左す

きバ神功皇后も後帯を用ひたまふ〳〵て御安産ととて思ハ
るゝなり。然るに少々の女人軍ごろ。さて和田鄙とちゞひ
驚華の地の婦人ハ。格別働るもの。言語大禄の人ハ
行ゝ働るものきた。布をいて後をまきそゝ甄たんの
めり。たとへ神功皇后御後帯を御用ひ〳〵とて。なほ
今の婦人の格に御後ハ〳〵を弱〳〵。後帯を強〳〵と
めるゆへ胎内のわゝハ伸るのもなりゝ。あまりに高紐〳〵
れて。見ぐるしかり。或ハ手のかるゝぬる。虚弱の子
なるゝと産るなり。たとへバ樹枝の本を結かゝげ。いぢけて
暢びゝきて同じるゝて。後帯ハ胎内の小児も自然と
のび育ゝ。虚弱ゝて格内ゝも居ゝて八月九月ゝて産

るあり。後帯の害をゝるゝあげて。かゞ〳〵。見腹帯乃
毛を吹加瘡をかゝもるゝ思ひ。見ふべし。見ゝに加川流
ゝて腹帯を用ざるゝと古方なゝ〳〵云て強流俗の
まあ〳〵きゝるものゝ云ハ大なる誤。女のゝ
をおたる人〳〵ハ結く考へ〳〵て。孫ゝも云やとかく
毛吹流の有者のきゝや。肝要のゝり。世俗腹帯をせバ
胎内のゝ大きくゝなりて。産ゝ〳〵ども見ゝ大なる俱
なゝ。格内ゝてゝぶゝるゝど。そゝゝねゝ産ゝ〳〵きゝぶるり
ゝるゝく後帯を用て胎内のゝを。よゝくする格のゝり。後帯を
用ゝ〳〵ゝ雖産ゝ云ゝるゝ。大ゝ猫も〳〵ゝ雖産ゝる
べきに。後帯を用ず産の難ハ大も猫もゝも吹ざる也

世俗産のるふハ戌の日を用ハ犬にあやかりてなのごとく。産を
経する格よとふ儀なり。そのほかの脇帯を用ず後ハ
見も犬の格に後帯を用ぬがよし。後帯を用ねど。犬きく
なる程よりハ大くわのごとく。犬猫と後帯を用ねど格ろ大犬
大猫の産するを見ず。謀よ見天然の妙がゝ有妙也。
加川流ハ自然と天然よりて後帯を用ず妊娠の婦人に食物
禁ずも。平生の人のごとく。大黄芒硝石蒸を用にかゝると害
なり。見毛を吹ざるのわるし。先以麻疹流行の年。麻疹に
妊婦流産するこの多し。そ師を妊娠の者多くつづり居
られ。情妊のこの麻疹にて一人も墮胎する者なし見加川
流を学ぶ故業の用かこの芒硝石蒸をおろそかにず掩せ故と

そ後ます〳〵加川を信ずるの神仏のごとく。胞産氣と
ふを貴も賤と婦人ざるの集る迄のみる習迄だらけ
にて毛を吹る多多。行又ひとよく見えるべし。先
産の催とふと髪の毛と眼のつよるべ結つめるの意し。
並て無軍にハ髪を強結てよきことのとんぼ石迄痛もこと
強き障もあれども。平日人ふ髪を結貫て毛ゞ二三本引つる
と。ひ痛ぶするの氣ぶあ〳〵きのといでも産まの時ハ眼の
つるゐどふ結ぶあても。頭痛ぶするもいとず。戸を閉屏風と
引回て日中を周教のごと〳〵。平生の人と右のごとく。髪を結
つめ周宮に七日も西方〳〵粥に焼陸味噌漬の香のこの
干鱈の煮汁ざりにてハ。産婦の人も産人とのるべし。

産婦の不安も必ず。産の中に四生あり。三七廿一日の間
是ハ近き誰云てゐく。三ツ目又ハ七日ばかり立て産婦の
格別苦しみよりきゆ。はるか流りのり是に付ても初より言
枕元のさだ行届宜に。そふも必ず。此産の中に産置
ていふ事も多き。の始あり。金創筋骨を切るゝ。血多く
流出たるゝ縫膏薬を附。動作ていい筋骨接かゝるゝの
ゝ屈伸せざるやうにすべし。まの掛るゝ。こらくて
横臥もさせぬ指ずするゆへ。出産も血の出るゝ多ゆ。よこねさせ
てハあくきとんぼ。つとなく金瘡同様の取扱といふべし。
産婦と生産がよきてゐなれど。病氣の上の産ゆゑ
平生のごとふ婦のゝ産さ臥ていハあくきるゝれど。病人のゝ

ゆ行ふ〳〵ていあくるべし。家内親類よりて。かゝて押ても
生産へきに。病人の産ハ横邪さするハ。辻褄の合ぬもの
流のゝ。犬も猫も産後平生の通り横臥して血ん
もなけれど人も平日の通りにて。よこねさせて。何の害のきと
ゝ。産婦と病人とおとひ。取扱ハ大ゝ違ゝ。女たるゝもの
役あれど。病ふあくば。たとへ日の産ハ近ハ平日の通りに
働居たるに。六ツ日ばかり俄ゝ産つきて。五ツ日より安産と
ゝふ程ゝにて。病人といふハ産やいゝ。
ゝるゝより。病人取扱ゝて。飲物ハ粥ゝ焼酒味噌汁の類
の物ばかり。ゝも腹も結ばりかゝげ。晴室へ居ゝる。故ゝ産ぶ
ゝる産婦ゝても。ついハ病人とゝりぬ。是毛と吹ゝ出のゝなり

犬も猫も産後飯粉ハ平日の飯なり。田舎山家の賤しきものゝ食ふ。自分産て自分臍を揚て不浄物も自身おれ去ふ。是病ふかふあるべし。然を富貴の家にてハ人よりぐ重り。戸とまゝ屏風を引まはす。髪の毛をまゝつけるべし。一ッ竈の中の釜の中一押込て。毛を吹て病人とまるる事。其内も雞卵を入て。たのこふなどハ人参も入て病人ともゝ。平生の人のごとく不ゝ。より前ゝ。怪我あるまゝ。たる者と同ゝ。人の介抱をも更ねばゝ。ぬるなり。その呂まゝと出ハ母の胎内より共合あるるなり。此の香ゝ示ゝ。ゝるのまゝども是ハ妊婦の初りて却て益なき沢加川家の口傳あれど。是ハ暑す。然なるから

正産と逆産とあるハ。又人間ふもあるあれど。左ふ手ずるなり正産とてハ。子の形より先ゝ出ると是ハ母の胎内ふあるゆより。頭を下ふして足の方を上ふてやどり居るものなり。夫也産る時ハ。より出るなり。俗ふ子がりとして産出すぐゝいとも。ゝうをする程の事ハ産の場ハ後の内ふ。もぶきなり逆産とふハ胎内よりある時ハ。ひとゝして足を下にして。ぶどり居る也。是より産出なり。胎内に逆にやどり居ハ。覓なりなきゝ。ゝでも。雞卵を粉糠の中ふて温むるやう腹の下にある時も横ふなりても逆よりても。せつるゝもなきと同る也。又胎内のあるゝち乳を呑居ちゝゝでも大なる産法なり。儀るとのひて仮のやうにて産る

あり。されども母の乳ぶさ、乳の中、乳の通ふ筋首あり。
胞衣より子の体へ血を送るあり。乳の假名乳と一字よ
りある血と乳と血とのあり。血と送と乳と送と
分れて乳を呑と思ふこと。この国よりあり。はして後に
記す。産まつき後の痛と虫がかぶると云るかぶると八食物
と云るにて蛔虫なりとて後の痛八虫が後の中にある血(そこ虫)も
や食物やにも思べられども蛔虫八口もとまき匂き中なり
左すれば是も食物すべ癖の虫なり。俗に云て癪の
或八血塊とて毛ぶまて居ものなり。ひるとふ後の国よりそ居る
虫ぶ居ものと思ふ食物となと。そ居るのハ多くの人にも
万人にもるく腐るなり。況胎内の小児の食物こそ腐も

なり。むしげづくと云も。虫ぶかぶると云より習ふものなり。
産乳なと云べ。まこのりの後痛六帖に。湯漬飯とむりに
進まども大みあり。さや産婦飢て好バ思。むりに与ふを
るなれ。初産の婦人八殊よさらぬ故後の痛苦八。むりにと飯
ものと分て。やつる〳〵弱る呑るのどよりて。吐逆るありて
よく〳〵ずの産まとふと。ものぶく後湯をつくるる尤悪し。
汗水よりまとして分産のもの湯を不宜して力薬ぶぎ。その上
十人の内六七人。妊婦八下部に産乳あるその乳。水まあるふ
八湯のあ〳〵きとこ八誰人も知るあり。後ふ産のそこ
あらまふも様ぶ。後湯とハ何るぞや。後湯のために産後の
水産多。是ハ小も毛と吹ゆ。産と乳なり。産のる者も後も

西村氏藏書

女ぐり集もの也。あてる事多るゝとのゝり。浸ぶ必を付て
弓毛のゝきゝ絡よ元扱毛。そ水ゝ多りれと、れと示要す。
扨産子をゝ多ゝ。産湯をゝ産やゝ多ゝ。あつき湯を
洗ゝ多大ふあ〳〵。産子ハ白き油の粉ゝ多ゝ。の躰ゝ付てあゝ多ゝり。
是を産婆ハ冷ゝ多ゝ。夫也あつき湯ゝ多ゝりれど
油ハゝけぬゝの石油ゝ多ゝ。髪の毛ゝ多ゝ。あつき湯ゝ多ゝて
洗ゝ多ゝ。産子の皮膚の粉を熱ゝ多ゝ湯ゝ多ゝ洗ゝ多ゝ婦ゝ多ゝ。
紅を塗ゝ多ゝ。小児の産ゝ多ゝ。
額ゝ多ゝ。付て亜〳〵。口中ハ粉もいふぬゝ多ゝ。七枚に産刷ゝ多ゝ
口を冷さんゝ多ゝ。近ゝ多ゝ。産湯をつかはゝ多ゝ。時ハ
痙瘡抔ゝ多ゝ。ひて号つかはぬ事ゝ多ゝ。産瘡ハわゝ多ゝき

たゝれハ本綿ノ綿ヲ黒焼ニシテ付マシ

ゝハ三ゝ多ゝ。三ゝ多ゝ。拭ゝ多ゝ大ふ。三ゝ多ゝ。湯ゝ多ゝ別ゝ多ゝ。
ゝ多ゝ害ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。脇ゝ多ゝ。常ゝ多ゝ後ゝ多ゝ。乾たゝ。
七夜ゝ多ゝ。十五日ゝ多ゝ。ゝ多ゝ湯ハつかはゝ多ゝ。ゝ多ゝ内ハ脇ゝ多ゝ
聰ゝ多ゝ。膝ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
ぐひ。ゝ多ゝ。ふあ〳〵。もめん綿ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
相州小田原の四ゝ多ゝ。御嶽山檜ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
ふ水ゝ多ゝ。御嶽山の氏子ハ昔ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
をつかふと。中ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
ひ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。
をゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。ゝ多ゝ。

中へ入るごとく。大すみ大つとるゑ熱毒猛動て。赤游丹毒を發し。或ハ口中 咽喉瘡を發し。眼中赤色をあらハし。皆熱毒のゝ病なり。その熱と合不又熱物の入るを用るゆゑ湯。紫圓などを用る陽者多くれど。五香湯ニ丁子の大辛熱なる三味。外四味木香と霍香も沈香乳香も多く温熱のものゆゑ尤惡し。又胎毒とするゆゑ云て用る紫圓と云。巴豆とふ大熱毒の三味入り。胎毒ハ強く強て却て猛毒の力熱するゆゑ。紫圓と云ハ少し変ゑ用る三味なれども急の熱みも用て惡し。巴豆ハ熱毒つよきゆゑ暫くくの丸塗附

置とき。皮膚爛或ハ粟粒のごとく腫とのり。少ふ多く用ゆ口中たゞれ或ハ猛角を傷胃も痛すゝし。少ハ体陽のゆゑ。辛甘胃熱多くして虫蟲角入或ハ口熱ゆゑ。齒茎かけるゆゑ。傷にみて齒とゝ大便も胃熱ゆゑ。かゝるゆゑ。その胃熱ある不。紫圓などの巴豆の入熱三味を用る。大便ハ下ゆゑ初ハ三粒位ゆゑ通ゝゆゑ。胃熱大のある不。紫圓の熱形と用る。七粒十粒とるゆゑ通ず。のゝ〻ハ十四廿粒と紫圓の都と悟ゝ胃熱と益たすけて胎毒と益。さらんふすゝるゆゑ。巴豆の毒のゆゑに遂ふ病と發するゆゑ悟ゝず。紫圓とも見の

持薬を用ゆる大ふ悪し。熱毒を加勢する也。疱瘡ゆ
ゑ重るべし。小児の泡瘡の呪ふ辰砂を用ゆ。辰砂の効
能寒涼ゆゑ心経の邪を避。熱毒を消する効能の
ゆゑなり。是をもつても此薬常に用てあしきことをふす
べきなり。急ふ下をほしきときあるべし。その指のさきハ
此薬備急丸と用て下をとるるふハ効あり。小児の持
薬ハ師ハ家法の牛黄真珠ゆの八仙齢丸を用ふ。
肝火鎮て大よし。近頃ハ小児の不快ときくらべ
ると此ふ薬よくことわりと是疱瘡ふんつかるゆゑなり。
少ハ大便の通じよきハ一体宜しきなれ此薬と
用て通じある時ハ。一旦のうまくとよきことのなれ此ハ宣の

ゆゑふもんつゞく用るゆゑなれども。物ゆゑあゝぶる寒涼の薬として
通利をとる時ハ。胃気も自然と弱れ。遂に大便不通の病を治し
て肝火のたらぶるゆゑ心火の発ふ。自然と発ゆゑ。
宜ふ良薬なり。ゑんと此薬と用ゆゝ二味承ゆゑ
ふと用ゆし。大人小児とも常ふ用て
ぬるゆ

○承氣丸の法

唐大黄　消石　名芒硝　辰砂を元也

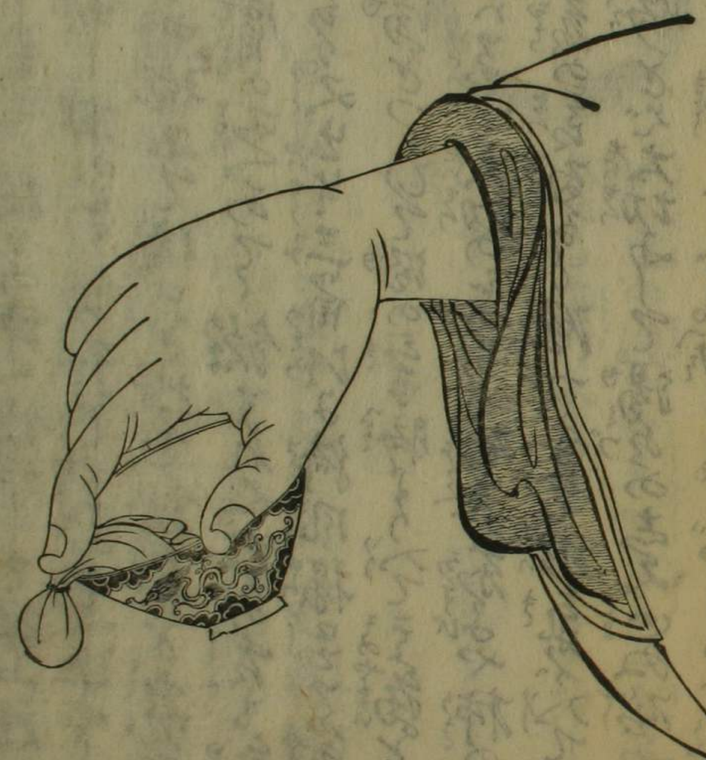
右二味桑粒の大小丸。出生の小児ハ多分拡ゆ用大便不
通るゝ時ハ追ゝ拡散を拡て用ゆ。又生長よきゝ
ゆゑ用てよし。消石ハ毎ゆゑ言ふもあるなれど。外科正
宗ゆゑ書物ゆ。消石一味ゆ心法の仕方ありて
ゆゑに用て。長生

延年するといふ法あきど大人と承ぶ丸と云ふ用て大に効あり。
産子にまゝりと云を用る和方ニて。神代のより用ることなり。
此まゝりとは海人草ニも鶏鳩菜ニも云て蚘虫を下す妙薬也
古ハ此まゝり一味を。産子に用ることなり。五味湯のみも甘連湯
のみと。まゝりといふ。まゝりと云ふ時ハ。鶏鳩菜のみ也。所ニ
出生に用るまゝりと云ハ。五味鶏鳩菜湯と云を代用ゆ

五味鶏鳩菜湯の法

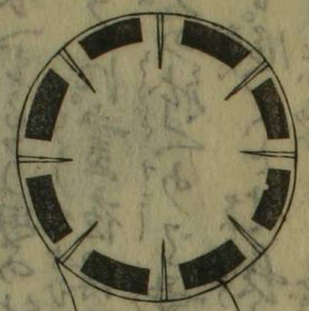
鶏冠菜大　紅花大　大黄大　甘草中　黄連中

右の五味を水少茶碗ニ一盃入ハ半用ニせんじ用。泡ヨリ
野蚕を加るのあり。乳豆ハ紅絹ぎれの中ニ菊花を入。包して用
九人ニ多く小児ハ少く吸て居ること引ちてハ。茶汁を飲て効せる



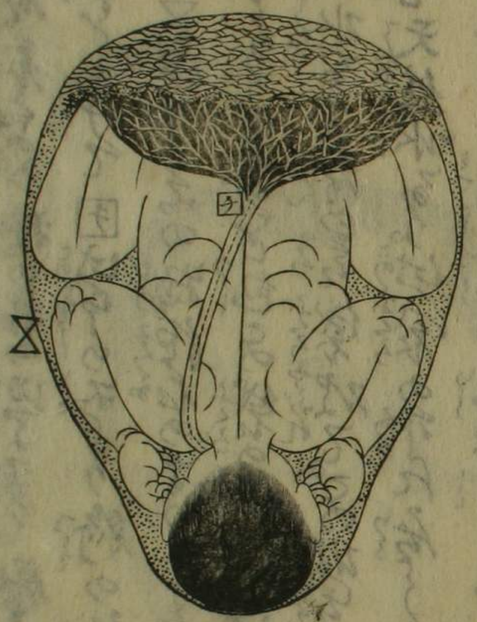
ゆなり。なく引出る舌を痛るあり。左ニ通して用べし

右圖のごとく薬を猪口の中へ飲ませ男子は乳房へ乳汁を
薬碗の外へ出す。末のきれのつを人指指
押へ大拇指と中指にて猪口をおさへ乳汁を口の中へ入れ
猪口を口の唇のあたへ飲すれば口の舌も潤ひ
薬も用ひ安し。又出生三日目に胞衣風撮口などの病発る
多し。三日目の湯をつかひて湯の三番目脇より入て三番湯とゆるる多
〜。産婦の脇に当て大切のものなり。胞衣柿の花の落た
てのごとく。胞衣の色黒くなるは降つゞきて水気入て腐る
なり故に脇をゞ大切にして。湯のあつさぬるく脇ふすべ。脇の
結あつまりて矢すぢ〜。脇のたゞれるゞ乱髪黒毛を
ふるひ抜て〜〜上へ艾のまく結〜るとつけそのとへ綿を
綿を丸〜して当て。押膏薬をはる〜



右圖のごとく脇をさすり余の丸さん切て。萬能膏を附
る。脇を大切にするなり。臍帯の中に二筋血の出入をする
血の通る管筋あり。母の血を胞衣へ入てそれより脇帯の中の
筋通りゆく。薬の茎のごとく。湯をつぐ。帯〜ごのごとく。先
母の血を絶て入て血より脇の法の巾の片方の血の後へ入方

の筋の中を通り。少の脉より入て。脉の中を又肝の経と
いふへ通る脉の結あるを。その脉より中の脉の枝の片方の八方
を通て。肝の脉へ血あつまりて。そを通り道の一身を面て又
元の肝の脉へもどりてやがて股のうちの脉の枝の片方の出るこを
通て。脉より出て。外の脉の枝の中の血の出方の筋を面て
胞衣へもどり。母の肝へ入て。母の血とともに。環の脉のきづ
ざとして。晝夜休まるく巡る。そのうちめぐる脉ばかりて
出見の肝へ入て母の血ばかりて。母の胎内にて乳を吞ず
とも。だんくと生長するそのうち。乳みて
おこり。胎内にて八右のざとく脉より血すておこる故にけるを
みて胎内にて。乳を吞るすることなきなり

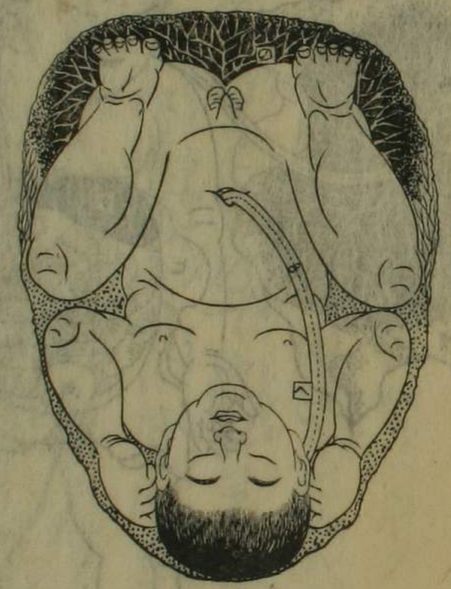


○胎内みて胞衣の中にある子の背面を見る図

右図のざとく。頭を下にして。尻を上にして。胎内にあると

正產とゝるめ氏血を出すことあり。胞衣は
出産の后の方後眼のうしろ附て有。其附根ふまるゝりて
ある故產まれの狀の眼の辺より驚あるゝ△けゝあるゝ
母の命とゝけて ㋖ けゝの水より脊の筋の中を通り出産の脊へ
へるり ☒ けゝのれの物胞衣のまいりよるさがりて落き白き袋
の袋とゝりてゝとゝ包こ袋の弔 けゝハ黏稠雞子白の如
き胞水なり。產の后袋破てこの水出て淫ひ。產やすくさもん
こ氏天然水なり。けゝ袋の弔たゝ后ゝ覺嚥吸るく產氏
こよ血よるの脊中ゝ氏へめるゝ。袋の中にて乳をのまぬ
事。是とれゝ也。世俗のゝるすの毛髮を知るべ
○胎内のゝ前よるゝ脊筋の續を見る圖

胞衣より脊筋。背に附て左の肩を越て。胸より腹ゝ
つきて脊へ入なり



㋐ けゝハ胞衣なり
㋑ けゝ脊筋なり。中の二筋を示す。血のおて
への二筋の管のゝすなる

○産子の腹の皮と云て後の肉の筋の後へ續と云る図

ヒ 臍の裂ひゝく後の皮なり　又 臍の中の筋より後へ付く

キ 臍のあるハ筋より脂肪なり　△ 臍の下筋の上後の皮と筋すれ

田 臍の下ハ胃腑なり　カ 臍ハ肝の腑なり

子 臍の下ハ大腸なり　ホ 臍より下ハ膀胱なり

ウ 臍の下背き後へ絶えのまゝ後へ縮附の図

○胞衣の一名混沌皮又ハ蟹河車とも云なり

又産の次よりあるを〻のちざんと云

右圖のごとく腸の筋ハ肝の後へ續あるゆゑ肝ふかなすべき

るゆゑ筋骨の落る夏ハ遅く冬ハ速し。兄ハ紐後阿際の

中央の脂あるゆゑ夏ハ乾ゆゑ筋の後も後あり

で。夏冬を以て遅速あり。又ハ兄の丈夫不丈夫ふより。又ハ腸

第。たき油きよりて。蒸すもよし。又俗よ腎臓の
もゝ切て寿命もつたゞと云て。腎臓と云べて也く切。或ハ
小き後へ結付也也へ水と氣多して乾也也。腹中へ温氣
入て大ふ悪。腎の臓い多一束ニ。三ヶ所切へ。又腎節の落
たるあと。多や。湯のあ。きといふ法。前の図のごとく。腎の腎節ハ
蒸ても腎より内の腎臓ぶ。肝の腎臓へ接ある木の内て腎の臓ら
ぬ也へ多の大きま。湯の水氣。杏ヨ行の腎へ通して。行氣たらぶり
心の腎へ杏氣とつて。脚風撮口の症と。發するて多。小児
八百歳ともるべき。寿命の湯氣と含み居也へ玉て純陽
のものなり。たゞさへ行の大氣たらぶりたるものなり。腎臓
水火の氣と腎の臓たて。毛と吹也へ腎風撮口の症

を治る也。又腎へ灸もすへ。湯もよへて。腎風撮口の發也ある也
へ。磨ち温灸の出来たるもの。仕音湯又ハ温みの湯をもへて内
攻するものなるゆ。河原の湯をても内攻と仕合の也ざる也
同ゆ也て。津ゆ治ゆ也ゆ。湯よりつゞめて内攻或ハ脚風
撮口の憂ハるきゆ。腎風撮口と二症ゆ一症ゆ也
の法あ也ゆ。一症と云て。風と云ハ手の名ゆ。水たの手ま腎よ
ヨへて發る症也。腎風と云ゆ。撮口と云ハ病のかゝゆの口と云
あつめて。小女の酸物と吹也ゆ口ゆ泡ゆ出也へ。
脚風撮口と一症と云て。腎臓七夜以ゆ也ゆ。
小児の薬ゆよりて。心胃の大の一つ。きゆ。ゆ。ごの
湯の出ざる。れよ吹ハ家法の清心丹ゆ。ふを用也大ふ法ある也

○清心丹の法

辰砂中　天花粉大　消石中（今芒硝を以て用ゆ）

右三味を。蜜と芭蕉根汁と。等分にして煉る。この法阿蘭陀のアンテスハスモシカルといふ薬をおしはかり。冥合の妙剤なり。師走子ハ十の内ハ九ハあの五味鷓鴣菜湯で。此清心丹を兼用して至て肥立よし。其余胎毒ハ陰気ありき所ごとく此二法を薬種屋へ調合させ用ゆべし。又二七日頃ハ胎毒内を蒸て口中へ乳をすふの母向ふあつて。鵞口瘡といふ吹出物を発することあり。是にハ師家の法に辰砂を三種薬を一処合中へ塗べし。治する神のごとし。実に百発百中の妙剤なり。此法師家にて世にたすけのために言弁して施す

所の法也。是ハ略す

○世上産子を。絹をもて包みかけるハ甚だ悪し。富貴の家なりとも。襦袢ハ木綿か紅染をもちゆべし。或ハ麻をもて裁縫するハ宜しきなり。礼記といふ書物の内にも十五歳迄ハ裘裳を着ずして。裘裳ハ太だ温物にして陰気を消すあり。日本までも昔ハ小児ハ。綿の入たる衣を着せず三才の附初て綿衣を着ることなり。滋野井公麗卿御作の簾中備忘抄の中に委くあれど。世々の天子も三歳の御時初て綿衣を着御なり。四歳より五歳の御付着御の例もあれど。臣下ハ皆綿のなきをもてあり。此ことは古実家松岡氏などを尋ねしにおもむきよし也。古ハ天子さへかくの

ごとく。されに當時ハ湯のさとへすれば出るすと云ひ
其人ハ行交。孫を産を産。あるひハ人參とおなじ。
家ハ出さず。出とも潮やぶ。毛を焼て灰のごとし。
太平の御代なれば中く右様の日ハ桃の木を
大丈夫みいるゝ事すべきなり。
る事。中毒の症戴人の説浴ふみ出す。又乳と初て付る。
俗説多し。左ふ示す。出生の時ハ胎毒とよく下てのち乳を付るべきなり。
て。治毒を下て後乳を付べきなり。
流産ハ胎毒を下ずに有べし。
初て熱毒を治毒と治べし。

前ふとゝ云べし。必ず男子ハ乳の時刻
ゝ廿四時過て付てよし。産母の乳の出る。廿四時
出ものなり。是天然自然嬰兒ハ生て直時乳を
吸ものも七日を乳ハ生ずして。霊ゝやすき尚のなり。
ひてそのことを下て。独ち毒ハ消。誠ハ天然ふたゝびて病も
るきかんと。そをとりて産と求て抜るなり。可笑可悲
の和一なるも。乳附とゝひて。人を彩て廿四時より
生るも。是ふたゝびふたゝび。犬も猫も猫と乳を付
乳の出ものにあゝ。ハ乳房をすべ。その時刻のまぬ
ゝちハ。人とだも猫を乳出ず。追て少出なり。
犬猫のふの乳と戻ものなり。人ハ乳付とゝ

のおよく出る。二三才の子にも呑する乳を。産れて初より
咽より出る程まで用ゆる甚悪し。産母の乳の三ヶ月より
ハ七夜二七夜過ぐれバ。これより出るなり。他の乳を用
ゆるともよろしからず。其の頃乳を飲すべきなり。必ず誕生の頃までハ
多き乳を用ゆる時ハ。吐乳の病を発す。初て乳を付
てよりハ。その程よくとらすべし。乳より乳を附る時ハ三時余
づつも過て呑すべし。多く飲すれバ。至て悪し。ふ着時ハ
湿熱相兼て。吐利の病を発すと。古人も云。吐乳の病
ハ飽に起り。熱に発すとあれども。多分乳ハ過る稀ます
事し。産婦自分の乳にて子を育るもの。乳の多きハ
他の乳の不足の子に。のませて余りをたすべき。自分の子と

乳過ずして。吐乳の患もなかるべし。又乳母を置て子を育
る人ハ。生れてより一年誕日頃近ハ。乳の多き乳人よりハ乳を
少き乳持を置て飲ますべし。子のためよし。
するハ乳の多き乳人するべし。乳人の子を里子にやらずに連
来て誕生頃まで。ハ両児へのませてよし。乳も多き由吐乳
の憂をなし。其より一年程の内ハ乳持も里子の事を定め
乳なきたつね来て。乳持の子も宜き所へ行て仕合するまで主人の子も
乳の多きて過るハ害なし。是ある令と云べし。乳なくも吐乳
の症ハ。飽に発し熱に発するとあれど。小児ハあまり温む
事ハ張子和か云ふ。唐人の小児愛するとて反て小児を害
すといふ説あり。世上の人その言を悟る挿するなり。師ハ其の

言と守て用ゐ治療を施さん。経驗験〻多くの
説を左に記す。
張子和の曰。嬰児の病は飽に傷て。人〻稚子を苦しむ。
腸胃に何ぞ入こと〻ると雖ども察せず。一切哭と泣けど。
飢と思ひ。急に乳を飲すと。その名言を知らずして。
吐ざれを不ロ。此の飲に乳に乳の
過多てきに混ぜ乳て。吐れの病ある。陽を看て陽の
根本を不明して。人参を黄耆に代ると。独ちあの薬と
些か相違する所よりて。病いよ〻重くなりて。又曰
夏月を稚子を抱て。中風の寒に冒て情を入れ
寒を感て。先は表に入て経を犯す故に臣炎

小抱眠をなす。後の寒を冒入さるゆゑ大緩不泄
如此して。衰老の人たりとも甚不可。況純陽の小児を温
その上に。乳を過多。又その上に乳を飲る薬を
病に加勢するなり。小人の治療は第一先病の名を
をあらして。治療を施す。と。富貴の家は衣食あまり
ありて温めるに加生子常に弱し。貧賤の家は衣食不足
也。寒がるれば負て堅るなり。貧るれのゆゑ物なり。我あるに
すたるゝ。ぬる薬を知る故ぬるなり。怒るゆゑ肝の病也
又曰。安のゆゑ我を〻也。怒ると多く時に肝大たらざる
也。肝の病多〻ある。多くは金銀なるれば薬自由なるゝず
少也。死を召す。と。曰く。銀山砒自由たりて薬を

自行ふて多く死者多し又曰貧富ハ子を育る
る旨也とす何ぞ少の就全するを又て富
貴より多し然ハ如ずく子を育の理に合る四つあり
先衣服厚く食物厚味なる怒るを少し是一つなり全部なき
也然ハ少く庸醫狂暴を以て攻ず是二つなり母の胎
内にある時母よく働かず安寧なる是三つなり母よく動作する故去も易し是四つなり此四つの
なり富家にあるものハ又曰子を育ふの法と人に授た
ぶ覚いずくんぞ貧家にあるものハ乏しく是の上と這せ多く病の
へたる衣服を美ずよく雲に乗ぶと雖の手に水と入
るの巾に涙の絞木の葉の痕のあるべしと絞をいて

絞つ〳〵ぬ多くその巾に入ぬハ浮一ハ沈ぶ〳〵ことなるべし
是ことを知ることセ又先哲の時ハ水を掬セ浮るとの
冷ものとい事とて知べし此もの物と部ものあり
内経にいふ所ふるきと本のもつすもの多い法のあるべし
云ハ時ハ乳心の孫ハ法とて那ずして才一
のことをなりとあり昔の唐人の中ハと育の法ハのごとし
当時の中人と言べ今ハ是ぞ温ぞ寒の温
なりて脾胃を補ぶよきことい同作の毛吹流の
庸醫多の了なるべし昔と穏古ハ人の曰ニ和より福
と醫すべ人を養べあるべ食物人を養ふ為と陽す
る不能とあり是ことを人を養ふ為とあるべ人を養や

黄氏ら。脾胃を補へと。ものるべし。四五日のるに三度の食をすすめて。補中益氣湯十全大補湯或ハ附子理中湯などを。ふ彼用て見る。体の氣力もぬけて。働くすべなくなりたる。湯をもすべし。況や長服をも。食するものあるべし。人をもちふるべ。食すると。病を医するあるいハ。蘇東坡などの好物の人のごとくなり。脾胃を補などいふ。庸医たちは。大智の全をもつあるべ。病を挑行どの。ぶ。病を種とのふ。ぶ。たとハ人ハ飯を止て。人参附子を用て思ひ。ふ。古人も病て薬を用ず。中強ふ強ふ。とらひ。ぶ。ものるべし。大人ともに。叶理用るべ。列て。四人ハ。

純陽みて。脾胃ふ濕熱多。氣ふも。ぶ。胃熱ふの。ふ歯の痛或ハ口中吹出物ふ多。故ふ氣ふ冷物を。日〳〵飲て。その胃熱をつめ。胃熱の湯を去を。山見を。種ふ生ず。是冷物の氣ふ補剤をなる。大黄芒硝も。補剤をいふの塊ふ。異者の薬ざる。ふ。思ひ考て。ぶ。思も育ぶきるるも。

恬惔 恬惔

老婆心書巻下

東都　芝黐羽佐間先生口訣

東都　森宗哲清之
會津　蓮沼榮碩敬信　交

門人

唐津　田邉玄樹　靜
備中松山　鈴木三悅　重房　述

内経に曰。上古の人は恬惔虛無にして真氣これに從ひ。精神常に内を守る。病なんぞ從ひ來らんや。この故に能百歳の壽を度るとあり。又曰。古の人は禽獸と同ふして居て暑寒を避け陰地に居て暑を避け恬惔の世とあるゆゑに自然を病ず。免角天然のまゝにて

たきものなり。稀〻毛をふくめて病をなすあげてかぞへがたし。古の人は和漢ともに性命の道を究め、身性の理をとき、病の源を考へ、薬を施せり。今のごとくなる驚考をいふて別なり。自然の理を知る人が薬性の理を考へ、薬を施せり。事也。されども日本も中華も天子諸侯のどく薬を施すことなり。日本にて太己貴尊、少彦名尊、或は和氣清麿、丹波康頼、菅原岑嗣、是皆聖人なり。中華にては伏羲、神農、黄帝、これ皆天子なり。岐伯、雷公、扁鵲、張仲景、これ〻は皆聖人なり。今てうぐ御大名方也。上天子諸侯さへぬけてのがれぬ。下〻は庶人のなやみ、人〻自然の理を弁へ、驚御心掛べき

事なり。宋人程伊川の曰、病て床に臥す。是を庸醫ふ委る。不孝不慈なりといふ。親に事る者、醫道を知ずんば、あるべからずとあり。親のなきに人のまるべきことの教なるべし。心掛なれば是人〻驚をも掛べきことの大なる関違とあるべし。あのごとくなる過ちは大切のなるべし。

病の原を能〻思ひ附べきなり。

扨小児ふ慢驚風と云病、世の人の知わるくて慢驚風ハ不治症とのけとのよふなれども治療よんどを為しあるまじ。この病の原ハ吐乳より發るなり。前に云ごとく吐乳の症ハ飽て出るなり。熱ふおこるとありて、夏は陽

氣の盛節ゆへ別して吐乳の症多し。是火熱なり
して發る不明し。この症のある小兒は。常に稟受虛
弱にして。内外感ることなり。病る不ハ時ハ陽火盛の若
乳過るゆへ。温熱あるを兼て急に吐乳の症ともなる
古人の曰。俄に發るを急驚風と云て陽症なり。吐乳
日ごと重て發るを。慢驚風と云て陰症なり。先主劑
ハ錢氏白朮散或ハ淨府湯などを用ひ。又ハ醒脾散の清心抑肝湯の沈香天麻湯
の類に附子烏頭かの入温熱の藥を用ひ或ハ黙固
よ人參よ參ること皆〳〵補の事のことなるなり
ゆへ前ハ世〳〵に古格の治療をなすゆへ治するを

又ず。既〳〵思ふこの方術等ていハ惕驚風の治る
事なきハ是慢驚風の的中ハ法ゆあるゆへ。
ハ法術を用るゆへあるゆへ。病の治さぬことなるやあ
るべしと。種〳〵考るふ。惕驚風の慢のよハ急なり
ことあるて。おこることなるすて。やるべきと義ゆへ俄み
發〳〵ず。吐乳毎日〳〵ゆへ。ゆるくておこる弱風と
ふ義なて。急驚風と。慢驚風も。出るハの容態と
同様にて。口眼喎斜し。竊視をなす。手足搐搦をなす
筋を引つゆるゆへなる。肝ハ筋をつかさどるゆへて
古書にも。肝病ハ筋を營る事。あたわざれば舌強
口噤喝邪。癎痰不遂不仁等の症ありと云。是弱風

の症ハ。肝火のなす所なり。搖頭弄舌ハ心火の然る
ところなる歟。眼黑睛露も。肝火のなす所。皆是火症なり
変して陰陽ふたつの論にかゝるべし。弱風と
云所と同なりして治療すべし。虛弱強壯陰症
陽症の論かゝる時ハ。病人をあやまつなり。目
前なるを。譬ハ婦人の衣服を仕裁すると同様にて一用
に仕立ると。毎日〳〵あつらへて拵つゝ。日を経て
今日ハ仕立べしと思ふと。その日に仕立揚るなり。日の
遲速ハ有るとも。仕立ハ同様に終に同なるなり。弱
風と右のとく。四に変ハあれども。皆なる症ハ同様也
いとなるも同事なり。その症の系と同く。急驚

風慢驚風なども。肝火心火とを分る系と用ひ
その病の原を察するに。飽食の伏あるて内経
ていふ書物に曰。穀貴に入て肺の臟ふの氣を伏て
五藏六腑皆氣を受る。食不納ときハ。五臟六腑皆
渴とあり。前にも云とく。張子和の不消。乳過多ハい
温仕ると及ぼすとかつて。温病大損ずして吐乳の症を發す
吐ハ穀の貴ふ入ざると同〳〵なるにて。五臟六腑そゝ氣
を受ぬるゆへ皆病なり。此を胃の系とんなるべて
補ぶようなるを思ひ。系附ふのゝ系を与へて。ますく
胃病たをたすけるなり。此ようにて發風と云
なりぬ。左ようなるとず。思ふ云ふとの。肝火盛ゝのゝ

肝火胃を犯し。肝木土を侮る。胃脘枯槁して胃大又盛るなり。是胃病肝火のたゝぶるなりして慢驚風の發るなり。古人の規則を離れ。清肝湯中脘胸湯などいの法を用ひられて。慢驚風の治るなり奇なり妙なる世の議に論より誘掖ない実にこの事なり。古人の急驚風慢驚風慢脾風などの論ぐるみて病を用ひ少も効のなきにも心附ずして。かく規矩を別と用ひて死しても療治の誤ひ不悟して。慢驚風ハ治ぬものと思ひ居い。治療に海切なるなり師い治療のなるふ是を忘れんと碎くなり。慢驚風のなるものなり。法方みを用て効のなきを云ひあるまゝ。病症を某の的當なるを人のなるなりて。孟子の不得為く書を信せぐ。書なきよりはなるを云ふ。古人の論説をなして療治してもなを病人ハ益なるけまで何の役なるを云ずして既ハ慢驚風も。古人の規則を離れて寒劑を用て効あるなり。治療ハ深切の顕るなる庸醫の雖ハ不なり。近ク京都に中神右内と云医師なり。ハ人なるて大いの人なるて治療切者なりその説に法藥の郷皆古人の規則を離れぬ。何なるなるを体の妙不にるるなるずして云ふ。確論なり師の治療も。大に古人の規則を離て施すなる多し。中神氏の立て暗に合ず。病人に大ハ益あるなる。中神なるなる実

み病癒るゝ。仲景を医てつかふるゝ法
たゞ浮世の。教示して可ゝる法論るゝ。仲景を君の
ごゝ。そゝぶ世の中に右脈の法。なかゝ庸医のいとい
まるゝにあゝ師と規則を離ざれど陽毒風の
治療も的中なるまゝきん。規則を離き。寒証を
ちて効あゝ。その意をいて吐乳のゝちよゝ。その
脈のそゝをちて。陽毒風ゝまでみいたゝずして治る
事。経験多ゝ人ゝ味ゝ考べゝ。其清肝湯の法

黄連　黄柏　石羔　辰砂　青黛　芒硝
野香　鐵粉　大黄　甘草　連竟
右十一味ゝ煮て用る湯甚きものにい冷飲さすべし

症によりて大黄ハ減す。別煎して用る。中隔胸
湯の法

括蔞實　芒硝　甘遂　葶藶　山椒子
黄連　半夏　大黄
右七味水煎として用る。鯉用ハ紫雪と云薬を。症ハ
よりて。一ゝ二ゝ用る。この紫雪とハ薬ハ。容易ハ
ある薬にあゝ。加州ハ世上施のため買する所の
紫雪ハ師ハ品を多く調ゝ用る取次不ものゝ月
岸和田ハ法と云ものゝ方にあゝ。法書品と暑す。右
の三法を以て。発る風と治するゝ。変論はあゝず。實ハ
用て効ある所の経験法ちゝ。乳とちるゝ。大ハ法度

あるべきなり。この法ふ書法に載せ〜ぬる事多し。
古へ河ぶふ用ひ〜るるれども中頃とり人参附るぶ
流行にて。世書ホの書法ぱいつとなくすたれて袋入
ることなり。瘡瘍熱病ホも用て大効ある良劑なり
用ひ試てその効を見たまへ〜
又前にも云ふ〜水中に黄のまゝ入給るゞ封て
手を冷すこの法あり。手脚も寒ことなるる
あるべ師先に某家の小児。痘ことなるふとなる。氣ふ重
く。腹滿日暮潮熱。身体痩て。極び歩行とも不好
治日法ふ効なり。食を含こと。雀離のごく。粥汁を
煙てみも飲ず。消丸ことで少い用ゆ。その父母なたがな

玩物を与て。家えのよきやふと。去渇よ寒よ危刀よ
本偶よ屏風去類よと。千紙万種の弄ふを集め
太孺人いとてより。刃就。乳母も。飯戯の客ことるまを
人ことなり。相分ことなりて看病多日なり。醫も(医)
これと棲て療治すれども。彼ふ同容ふ師に治
療をこ師聆ふ〜て曰。ふ蛔痘の症なり生ことの
ふ物ることであ〜。ふ〜動作と媚て生て食物
のことを好ふ。右指の尖て玩ぶ手弄物〜のかのことなり
小児ハ去を躍ることの一の症なり。手足も生てらぬ
ふふ物の。屋ホ〜ものて去を溜極ふふ。鍬或ハ車
るゞに紐ることを結て去地を牽せるゞするゆふ

弄物をとらつまごぐそれみだまうれ自ようと家の人出あつぶ
るのあるゝ。是一つの業なり。業げハ婦ふ事るのれくれ丸
劑をとらつべゝして。四方の廳湖菜丸とらへ師のさつづ
のゝ。流あとゝゝ服業するれ。情中ハ九匹ゝりて道昔
快和す。右ようのをとの病みてくまけるんを用べ
又同ようなの病て異て賣賠病みて
俗よい。乳ぐるまと云て。身体痩て筋力なく終日食の
ため泣哭而已るり。一醫の曰。賠病ハ食物るて甘味
弼のゝふ。かるきら魚ゝ肉ゝ。ゝて厳禁して。銭氏白丸散
消疳湯浄府湯の類の薬をとらふ。病れるの弱のことを
ゝるも。茶熟して醴のゝ弼を。病ちよこれ二弼ゝゝ

白雪糕を二三本ゝるゝ。ゝて服薬するれ。ゝ切るゝ
おひゝ瘦痒て。骨とゝ。終日食物のるゝゝを
云て泣ゝるれ。病者ゝ見まして。是ハ脾疳ゝふ
るゝて。ゝ食禁ふと束一ま云ゝ。病ゝハ服ゝ薬を塩
て。後よい砂糖のいる物一切あゝ。ゝて白雪糕もとらぬ
ゝ。ゝゝ痩痒てまゝ。ゝ軍ばゝるゝ。近日崔月
なり。腰をぬけ。ゝまるゝも。弱ゝ。弱死ゝらあ。その親族
来て病ゝ治方をとゝ。ゝ進む。ゝ父母の曰。ゝ
たのゝ醫士月ゝ来て。飯の粉のたふまでゝとぎんして
おふ粉も蒙ゝ。減よ泥切の治療ゝ。死ゝも他の弱ゝと
たのむ人及ずゝゝ。親族の曰。ゝのれゝも。世の弱ゝ泥

みを膝にも読合せこゝもあれば。又人の思ひ出とも可とよ。服薬い急も角と。殆あぶなくなりたるのゝ色しといへど。強ては宜やうと任すれば。親族来て所にかゝるを諫る所。殆あぶなくして曰。この疱瘡過より病増長し乳ぞるれしふ。駆い早神と云字にて。乳の早駆乳の飢饉とふ言葉にて。乳のるきこゝよ。三度の飯もらへざる色。餐湯して病とるる色。古人魅病といふ名付たるなるを。此疱瘡の先一食物不足よりして病いよ〳〵増長し。食物を与へる色。飢して啼ども食を与へず。強く泣色。肝気を損じて。首目ふるへ

飢渇して痩痩け。古人のいはゞ過たる形不及と。食物を減過て。却てめけの客説といたりぬ。食物予云ふ量のあいだ。ふるへ。ひの穢ふ。花弁も。花ぐ〳〵ひ。頭魚。雑魚。作まる魚。野菜い行〳〵。菓子いはゞ〳〵云て。家方地膚子陽子云を与へ。所の云ぐ〳〵節度をもて。全物す。ふるへと弱の源。切のりあず。乳けの不ふるへ。食物と分量をもてふるへ。のゝ和もあい。切の不ふるへて。病い増もしたる色。食をひらるも。好あるなきを事なり。又小児は解顱の症。蓋のひ〳〵まして。大〳〵

るゝものなり。是も古人の法。皆の稟受を弱くして。腎氣盛なるゝず。脳髓も氣血も不足なるゆへ。温補の薬を用ひ。或い弟子をして。又ハ細辛桂心才の辛熱大の薬を。とくゝ。ぬるゝのごとくするゝこの治療をなるやゝ。更て効なくして。かゝつて益大くなるゆへ。是則古人の論法のゝとゝもて療治を施す。須ゝてする切の過也。古者書藉なきゝ時ゝ。萬ゝの知ゝ者ゝ治療をぬけてゝ。今ハ世ゝ人ゝ。あてゝすゝて。古人の糟粕を嘗ゝ。物を規ゝとなりて。齟齬の療治をなゝす。他ゝのゝ。菓のゝ。ゝ。人の命を誤るゝすゝるゝ。ぬゝ大切のゝゝなり。深切のゝなり。深切をゝ。病の原をよくゝ考て。菓をゝ。

解顱疵圖

ひ解顱の病のある小兒は。出生の時より囟のごとく。頭の骨を指して推探りてみるに。この病の骨はうすきゆゑ。合ぬことのあるなり。この病あるは。追々に大きくなるゆゑ。ふくらんとなりてすきあるは。眼中を黒睛ひとみとなりて上を視るゆゑ。ひとなりすべて小兒は諸の骨軟弱なるゆゑ。解顱の病ある小兒は別して。囟のごとく顱骨不合心火たらぶるゆゑなり。心肝の火盛ときは頭蓋ひとしくなり。蓋は意識の府にして人の思慮を弁さすも。眼口耳鼻の用をなすと。皆この腦髓のなすなり。腦は心のお城なり。腦髓の中のかくれたる所は中は神室常に盛なるの府なり。この内ふ心たらぶる時は腦髓の素弱なるなり。頭蓋骨軟弱にして不合の内より張ふくらんで虚弱の窒のごとく四方に用てだんだんと大くなるなり。

治法内ひは温補の薬をもひ。外ひは辛熱の薬をもひ。陽氣を助て。張満を早して。治する不いなり。弟をもひて脾を補す。内よりは温補。外よりは辛温の薬をもひて。陽氣を助て。張満を早して。治する不いなり。弟をもひて脾を補す。内よりは温補。外よりは辛温の薬をもひて。病の加勢して益用解

居室ふあるて胸のくちなり。頭蓋は商賈をする肆のごとく。目の視耳の聴口の味をとる鼻の香臭を辨るも皆腦髓の中のかくれたる所なり。この内ふ心たらぶる時は腦髓の素弱なるの府なり。頭蓋骨軟弱にして不合の内より張ふくらんでなる。頭蓋骨軟弱にして不合の内より張ふくらんで虚弱の窒のごとく四方に用てだんだんと大くなるなり。

治法内ひは温補の薬をもひ。外ひは辛熱の薬をもひて。陽氣を助て。張満を早して。治する不いなり。弟をもひて脾を補す。内よりは温補。外よりは辛温の薬をもひて。病の加勢して益用解

すること。南瓜のごとく。驚たんのごとく。心神なるとなるつねに
はゝ疝の小児笑こゝめく喜事多し。眼睛と動揺たゝ
脳中ふ病ありて。眼を動す筋とひかぬ白黒睛下
にたれ。とゝ祝ゝゝゝず三白睛となりすゝきき
ハ。白睛ばかりとなるなり。つひに死す。あゝゝゝ死
とすゝめかれ〳〵ハ。生産の廃人となるべ。よていこの
疝ふ。禀受虚弱にして。骨髓の不足のゆへハ。唐茸地
黄丸。ゝゝ。前ゝゝ。秘降気湯ゝゝと用頭へゝ
邪清飲ゝゝ。ゝゝ。塗茶ゝゝ。枕ふ菊
花一升〔志ゝ豆二合〕ゝゝ合て。麻布のひと
へ袋に入て。是を枕とするべし。ゝゝゝゝ

この治方も。古人のなべてゝ。規則と離て添城
の顕るゝゝこの秘の法ふゝゝより大人も常に
用てゝ。逆ふ黄鳳
ゝゝ。涌者。耳ゝ用るべしあき
の毒を保らゝあもてゝ老人も用て益あんゝ
又小児ふ。亀胸亀脊ゝゝ病ある。俗ふゝゝゝ
脊の骨。胸の骨の高くゝるゝ病ゝゝ甚ゝゝゝ
歩行もゝゝゝ。是ゝゝ虫のゝゝゝゝ浄治
湯。又い鶴胡菜湯ふの剤と用ゝて益脊骨曲高く
なるゝて没ふい腰脚の筋を牽縮歩行もゝゝゝ
絶ふい度人ゝゝするなり。けゝ病古人の況ふてハ乳母

酒類五辛ホを多食たるその氣を飲するものゝ云
うも酒麺を食たもぐとて龜胸龜脊の症ゝなるもの
みとあり心火の然ゝ心火むるゝして胸膈に痰ともち
肺張痰心より肝より血かゝきて筋を攣縮胷膈
心肺の痰ゝして張満るゝ胸の骨ハ軟るゝものゝれくぼ
脊の骨ハ筋に引つゝれて拳て展かゝ弓のゝ曲
て龜胸龜脊とゝのるゝもの病の出ゝ顔色常に
青白ゝして元氣なゝ病ゝ舎ゝ痰ゝ多ゝ
ゝるゝ水ゝ食ゝなゝ食ゝこの人ゝ双親も常ゝ虚弱
ゝとゝ思ひ居ゝ酸ゝ祝ゝ霊弱ゝ
補ゝよきゝ思ひ人ゝと云ゝ釈たゝい為て虚弱て

思ふゝ思ふゝこびゝその温補の薬を用ゝ益ゝ
の加勢ゝして遂ゝ廢人ゝとゝなれゝも前の解顱の症
と同ゝして治ゝ病益甚ゝ
この症のゝとゝ傷寒論ゝ云ゝ
用ひ山脇家の方の化毒丸芎ゝと魚用ゝて度ゝ効ゝ
氣ゝとゝ
附ゝ人ゝもゝ
あゝと思ひ
の剤ゝ更ゝ効ゝ

補劑とらふ事あるべし。補ハ養の義なり。人参ハ脾胃を補
の元氣を補のといへども。老人なれば常々持薬ハ用ゆる
にあらず前ふもゝ〳〵。蘇東坡の語ゆ某い雖病を医
する。人を害ふと。何ぞ〳〵とあるべし。三度の飯を止て
某ぞう飯で居ることきい多く病を發し。虚弱の人或い
老人ゆとい持薬ゆ。八味腎氣丸又ハ歸脾湯。大
補湯なぞ。人参ハ人参黄芪ハ補善
物ゆあらずして。清濁を分ち。人参附子ハ温剤ゆ
用ゆれば。津液を分ち。老人ハ大ぶ真陰
虧損して目〳〵ハ形神枯沉ハ不人参ハ温剤を用る
時ハ。その温薬のためハ益ハ便乾〳〵す。清濁を招ふ

干〳〵。目〳〵ハ枯けゞ乾て。便ハ枯て遂
ハ。ゆ水を亡ずるゆ。老人ハ追〳〵真陰を
不足するゆ。ちからふりて肺ハ盛ゆ。咳出
或ハ胃中乾て大便秘結〳〵。或ハ失動して身体も枯
燥眼の潤もうすくなりてもすみ。耳鳴る是腎虚
の不足のゆえ。常〳〵持薬ゆ。
きハ。手足ハ真陰を培ふ薬を用る時ハ。氣血を循環
して身体を温なり。是ハの丸ハ師ハ必ず用て老人
の常ゆ。ゆ薬ゆて。
と用ゆ。中風偏枯不遂の病ハ大人のゝなるべ

けん症あるべし中風不遂の症あるべしてつかまつり肝
ちからぶり風を中るまうして發るる限り酒を好
の人肥人のとくなるべく何人なりても此症あり其風症
也別して酒を好人肥肉人多あるべし痩人なりても
肝火盛なるに又多し是胃熱者或は肝火の症ある
不べし風に中て發る病なるべし中風は熱症なるべ
悟べずして陽なるべしの人温熱なるべを的中の治方の
やうにて或は烏頭湯を用るべし湯なるべ
の方は中風偏枯不遂の症を用る如の剤あるべ大人出なるに
毎〳〵用ひて経驗あり論説某ふるべも其他とこちなり
その説は清人田演の徐大椿の著書は醫學源流論と

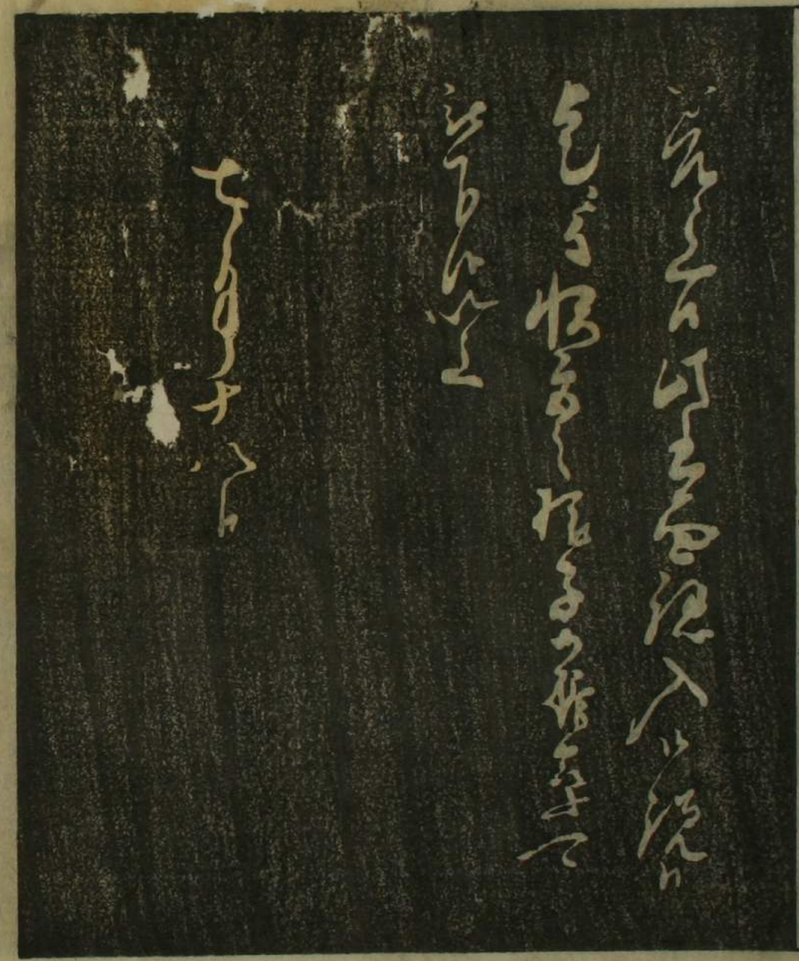
いふあるべけ中風論と隙の説と暗よ符合すけ書世に
ありそのべそのの論と畧相ちがひます

徐大椿曰今之患中風偏痺等病者百無一愈十死
其九非其症俱不治皆醫者誤之也凡古聖定病之
名必指其寔名曰中風則其病屬風可知既為風病
則生病之方必以治風為本故仲景候氏黒散風引
湯防己地黄湯及唐人大小續命等方皆多用風藥
而曰症增減蓋以風入経絡則内風與外風相煽致
致痰火一時壅塞惟宜先驅其風繼清痰火而後調
其氣血則経脉可以漸通今人一見中風等症即用
人參附子熟地肉桂等純補温熱之品將風火痰氣

盡行補住輕者變重重者即死或有元氣未傷而感邪淺者亦必遷延時日以成偏枯永廢之人此非醫者誤之耶或云邪之所湊其氣必虛故補正即所以驅邪此大謬也惟其正虛而邪湊尤當急駐其邪以衛其正若更補其邪氣則正氣益不能支矣即使正氣全虛不能托邪於外亦宜於驅風藥中少加扶正之品以助驅邪之力待未有純用溫補者譬之盜賊入室宜當先驅盜賊而後固其墻垣未有盜賊未去而先固其墻垣者或云補藥托邪猶之增家人以禦盜也是又不然蓋服純補之藥斷無專補正不補邪之理非若家人之專於禦盜賊也是不但不驅盜并助盜矣況治病之法凡久病屬虛驟病屬實所謂虛者謂正虛也所謂實者謂邪實也中風乃急暴之症急實邪無實天下豈有動如常急然大虛而昏仆豈可不以實邪治之哉其中或有屬陰虛陽虛感實感寒之別則於治風方中隨所現之症加減之漢唐諸法具在可取而觀也故凡中風之類苟無中藏之絕症決有不可治者余九人患此症者遵余治法一二十年而今尚無恙者甚多惟服熱補者無一存者矣

この論密ふかなるもよくくこゝろを附てよくしげ編をよくくと不怪者多くかゝつて泝洄老もあるもそこの人

元の貢献なる者まして。論ずるまで益なし。論ずるまで
逢捧まして。現ゆ用て経験あり。しかれども法制も後論まで記す。劉河
間の中風論まで。会せざるふ。半身不遂の者師の療治
まて快者に。右の不遂或い右の不遂ものの内右不遂のもの
五三月の内まで。まさのかるふまふ。自分のまで記
ふて。完結記録まで。一二枚及古の中より法制ととなる
記す



しけ男子。一人い年五十一。その日までもてるのなくして。便不
ゆきて尿絶て。便不よたもれてよりまた分不通してなる。ゆえ

一人八年六十二歳を何事なく牧中快癒して。郷国
愛て起あがんとするに。まゝ不遂す。この為人も他ゴ
療治をとゝず。初よりの業を服して治する
又痿躄と云て。俗に足病あり。今世俗ゴ
ようひくと云病もこれなり。痿躄不遂不歩。皆同
類なれども。横近し。痿躄ハ多く大防風湯の発角
人参附子みなどの湯と与ふるとゝ。よくくての
ちゝん功にて
治かゝ。或ハ
云て。烏頭附子乾姜の湯剤を用て。鍼灸にて
病益甚しとあり。又曰痿弱ハ肺熱と本とす。そふ

焦て痿弱ちなる五臓ハ伝るなり。寒痛よあゝず。
痿病ハ温熱の薬を用ずよくを救と同
可慎〻。
痿。脚ハ
人小四人をみるも。猶ハ藤痛たるゆゑ
附子人ハと用るなり。
清安湯。牛黄真珠丸ハ
水腫。脚気。勞瘵。疽瘡
規のなり。この論説も浅漏ハ多く記すべし。
傷寒も世俗陰症の傷
陰症と云て附子人参と用て。熱ハ加勢して命と

誤りて黙〻。劉河間曰傷寒熱病を治するにも
独り柔剛と用ひて下す時は。刀命をして人を殺うと〻
あるべし。又曰病状甚だしくして陰症となるを云ふ。寒病
となるにあらずと云へり。註するに陰症といふは。寒病と
なんぬて。温剤の人参附子を用ひるを云ふ。附子人参
は陽症なるを云へり。附子人参にて世俗用ひ居るも柔附
なるべし。河間、治ずして人の命を誤るもの
多し。

ヲ

と用ゆる。今〻に邪
癒と頼まべし。この陰症の多く附子を用ゆるは
の初めなり。仲景とふ人ぶ病名を。傷寒と
附して傷寒論と書籍と書置たるものは寒
冷の氣が肺のうちに入て思ふに。陰症なるを云ふ
こんぬて。温剤の附子と用て人命を誤ちぬ。
寒い邪の名なり。邪ぬ云ふ外のものにあらず。
仲景なら傷寒論と云ふ外弱を傷邪論と書
きたるべし。しかるにて陰症の治法も知るべき
なり。傷寒なる病名を附されしものなり。
病て大醫の先生たちさへ思はれるものなり。
すべて九死なるべし。その際
と。温疫なるとなりてハ名より春にても持て居て
發するこゝろのすなはちものなるべ今〻

おて居て。衣の表みなにたまりて發するときに。今年の邪氣。去年の邪氣。脉にて見るる陽の氣の表を思ひやるべきなり。邪氣なども。なるべくは人の体へ入りて一月二月おて發ることのあるべし。稀疫こそ入ると七日ばかりにて發するものなり。時疫を發するものなり。時疫は冬の末に風と行きて翌三月に發する。邪氣の表にあるものなり。春の邪氣内へはいりてなるべし。夏の邪氣のなり。春の病なり。傷邪ともいふ。俗に熱病といふ。言の捷徑の病名なり。春夏秋冬にたりて其ちがひ病名なり。四季の時に

にあるて。容体のかはりのまるいあれども。傷寒論中の某法にて治するをもつて足れり。春夏秋冬にも傷寒なるべし。即傷邪病なり。四季の病名を傷寒の温疫のごとかるべきなり。傷寒論を傷邪論とかるべきなり。傷寒論中の某一のちがひの病名なり。又俗名の熱病ともいふ。水毒近道なり。三つの減淋とも。ふるいけなるべし。熱病とも云基なり。裏病と陰病と云ても。寒病と誤るべきなり。夏の時疫とも。傷寒論中の某法にて治療するとはまことに。夏の傷寒病なり。夏病なるべきに寒氣入ていたるべし

思ふまじ。邪のなす所と心得べし。俗に井中の水の夏
冬の寒暖をいれて人の体すなハちをもつてたとふる誤なり。
堀ぬき井戸の水ハ地中一丈も二丈も底にあるにて夏
ハ陽氣地のおもてにあらハれ。地中の水ハ冷なり。冬ハ陽氣
地の内にある所の盛陽の中に蔵き居る人の身づから
一二尺四方ばかりの体の中の冷なるよふし。故に暑
中ハ温しておもを好む。寒物を好す井の水のたとへの
如く。冬ハ人の体の中にて陽氣盛するによつて出汗をいで
煖をもちひず水をのみてもよかるべし。続て工夫して
察ふすべきことなり。張子和を劉河間の説をとり
用て。醫療にたり効あるて。人の為よろしきなり。陰

症なりとて。烏角附子なしといへども大切の事なりとて難し
薬を用て深切に治療すべきことなり。今より二三百
[illegible]世ハ醫者も[illegible]其のやうに思ふるまでも
[illegible]萬年云。かの子の時代も知者愚者の
論ずる者も今も同じことなり。古人といへどもよしあし
あることを知らずして古人をまるまんぐにするゆゑ。拘子宮紀
のあるありて。治療すまちがひになりて。薬の為に病
勢つのることにて黄泉の客となる人の多し。可悲の事
一なり。すべて人の知る所の傷寒論といふ書物ハ。張仲景と
云人の作なり。この張仲景といふハ。醫者で思ひて
居れども長沙といふ所の大名なり。譬へバ今の世にも

老人なるべきの至て多分のものハ見やすくして或ハ商陸
の葉い水氣をよく通さするの何い何の病もきくの
ていふことを委〳〵書分ケたるものなるべし。
仲景の書付置不の傷寒論の自序に認あるにハ古
方れのこゝろのれど。一家一門も考ふ事ハ二百人余も
あり〳〵ふ十年ものゝ間ぞるうちに。三分二病死するの
のあるもナ人のうち七人い傷寒にて死すべきものと
醫業ちく
よるを思ひ
のゝちより。系法ふもきぬして。傷寒論と云一部の
書物をこしらへたるい誠ニ仁恵すして。今の世

すでと古き系法の伝ふあるい是ハ全く仲景氏
の方切なるもこそ。方祖と云る敬へきてるもの。
業をしゝ
れで。
ず。長沙ところの名ハ
病をなるべきや。傷寒論と溝釋するでする人ハ
い仲景氏の口氣よあゝず。王叔和の攙入ものでこそ
ても。王叔和ハ晉の大醫甫令のこゝろれで。なのゝ屠畢
のるもあるべきてのるる。
ふてるるるり。叔和い大醫令のる由へ今仲景の口
氣とりの不ら叔和の口氣ふて。叔和の孫入ることわゞ
仲景の口氣も古きてるるもこれゝ。叔和をなる

人あしくいふとも。叔和の傷寒論を。撰次し
たまひしこそ。千歳の後今に至るまで伝り来るは
此王叔和の大切なる事也。仲景ハ漢の長沙の太守
にあれども。おほやけの漢書に伝あるべきに。此肝
要の漢書に伝なくて。名医録にみへてありて
も。諸説まちまちなり。この名医録といふ書も
あやしげなるものなり。荘子などにも人の
出して 王叔和も仲景と云
もとけて と紀するや。古書にも
由ハ是もなかりける。又ハ漢の長沙の太守の守
字の下に張の一字落字ともしられず。日本の

古のきハちがひて。治や他国のきさまもこそ古きと
いへ。もあることのなれ。扨予が親ぢなしとする
ことふしてなやし。俗に病人を打ん切るよ
病の しあふして。療治をとるす
まきてゐるも。病人をとふれてと病気をと診
切する医者もとよまた思ひ。病人を心切にして。病
家を不心切にするて下手医者と思ふ世の中なり。
病家をとん切にするとゐふハ。この病人ハ附子人参ハあ
しきと思へども。側の人の気をとりて。薄気ハまる
きの人参よきなり。病人の気をのへやしんする。行
言令色の医者のすをとらふなり。病家も心を付

醫者をよく見立て。たのむべきことなり。忠節の君父
の命をたのむものなれば。疎略にすべからず。又迷べからず
たとへのごとく。舟人多くて舟の山へ登るやうなり。毎に
病身なるものあるべき是人々醫を心掛ざるの誤
なり。前にもいふごとく。孝子にも親につかふるの醫
をまなぶべしとあれば。親のなき人なれば。人た
るもの醫を心掛べきことなれども。醫者ある
ものは。才を山へあげ……すべし。醫をも新にも
醫者を見て……を丸めて轉手のふ薬
藪医者をつくるもあまたとて薬種店の番頭どものもあ
まり優労もありし。番頭どものもんせうまで。風薬

癪の薬を調劑して。追々薬をも多くなり癪
是が九軒十軒とあるやうなれども。遂に誤を成
者もあるべし……薬を合せ治療する
……醫道……醫術の道のことを
……その道をしらず……ふ人なし。この道を心得
を思ひはずれたるかぎり利をあまりて醫者
みても。薬袋持草履奴をつれあるく醫者に
ても。番頭醫者といふべきか。古人曰。醫は性命の
原を究。経絡臓腑氣血骨脉洞然として
てらめく。然後其病の受る由を察して薬を
施すべしとあれば。又曰。醫教の原。伏羲より

神農黄帝に流まて。萬世に行はれ。
彰明会し。大道を本として自然の理
を法とし。又易経曰。理を究め性を盡て命を
知る。あるは。志ある君子よ。
思ひ為し。

老婆心書卷下

跋

[illegible]之道。莫大於[illegible]下。黄岐之術。莫大於
吾櫻先生。以方技鳴于世。
[illegible]哲。法方。排斥考証。覆轍。究性命
之源。法自然之理。建幟於方。高唱家學。而
行字内也。余從游有年矣。女聞講業。餘話
及與二三子記之。集作一卷。名曰老婆心書。稿成
呈露先生。先生不許。曰否。知吾者。以諸拱辭。
不知吾者。比諸瓦礫。蓋君子居業。備德。候

命。耶知而不悔。與衒技者流同羣。字卷懷之手。余云不然。我有攝舟。而不忍其漂溺。我有餘粟。而不忍見飢餓。竟命剞劂氏。壽之於不朽。以得效之。庶幾以充仁術之一端云。

文化丙子春

明　唐津　田邊玄樹撰

屋親恭書